

## 軽音楽クラブ部史(1)



田村 和雄  
(S37年卒・S)

私が明治大学に入学したのは昭和三十三年、駿河台校舎の構内では新入部員の募集が盛んに行われていた。その中でふと目にとまったのが一枚のポスター、「ジャズ愛好者募集中」とある。どんなことをやっているのかと案内の場所へ行ったところ、そこは記念館の二階で回廊の窓際に机を一つ置いてあるだけの受け付け場所、島田、安藤、稲垣先輩に初めてお目にかかった。部員の初顔合わせに指定された日時、場所へ向向いたが集まったのはおよそ三十人、そこで初めて判ったことは「これからクラブを作ろう。」ということでも何もない我々も「それは良いことだ」と部員の結束だけは固まった。がしかし神ならぬ身の知るよしもない我々にとってクラブを作るということがいかに大変であるかということ以後練習は月に一度、大学の教室、下倉薬

器の二階等で行われたが、当時は未だ楽器が高価で(国産品は未だ質が悪く殆どの人が輸入品を使っていたので)持っている人が少なく、フルバンドを作るといふ島田先輩達の目的には程遠いものであった。秋になりほぼメンバーも固定したところでやはり連絡場所、楽器置き場としての部室が必要であり、その確保には大学事務局の学生課へ届けが必要と知り、名を「ジャズクラブ」として設立趣意書、役員、部員名簿等を揃えて提出した。数日を経て得た返答は「ジャズなどという退廃的な音楽を勉学にそしむべき学生がやることは大学の本質に反する。よって不認可とする。」というものであった。部員の落胆は大きかったがその後クラブは自然消滅の運命をたどったのである。

クラブ設立が不認可となると次第に部員の意気も消沈し、その後練習も途絶えてわずか半年余の寿命でジャズクラブは消滅してしまっただ。

明けて昭和三十四年の春、大学二年生となつた私はジャズのことではもう頭から消えて自動車部へでも入ろうと駿河台校舎の門をくぐった。そこでバツタリと出会ったのが島田、安藤の両先輩であった。喫茶店に入って話をしているうちに、もう一度クラブを作り直そう、という事になつてしまった。話の成り行きから私も自動車部へ入るのを諦め、今度は前の轍は踏まぬようにと慎重に先輩達と共に行動と調査を開始した。部員は旧ジャズクラブのメンバーと新入生の募集で五十人ほど集まった。調査の結果は、公認団体となるには大学当局への届出だけでは駄目、部学生の組織である文化部連合会(以下、文連)又は一部学生の組織で

ある研究部連合会(以下、研連)に所属しなければならぬことが判った。文連は先ず同好会結成届を出し約一年で仮公認を受け更に二年ほど経て公認される事、研連も手続きやその後の順序は同じであるが公認は一年ほどで下りることも判った。(公認団体のメリットは「明治大学」の名を使って活動できる事と補助金が交付される事にある。)幸い部員に研連会長の友人がいたので部室を早く確保するためと、いろいろ便宜も計って貰えそうだと研連に所属することにした。学生課へはハワイアン、タンゴ、ウエスタン等の民族音楽の研究サークル「軽音楽クラブ」の名で届出することにしジャズのジの字も出さないことにした。やっていることはジャズで他は何もやっていないの部員募集をやつたりもした。



各バンドを傘下とするこのクラブ形態は、私の友人が所属していた立教大学軽音楽クラブを範としたもので、後にバンドの不祥事、消滅等にあつても軽音楽クラブが今日まで命脈を保ってきた基盤となつていることはOB各位も承知のことである。昨今の現役バンドの独立、その噂は理由、善悪、是非等とは別にクラブの存続に関わるこの支え合い、「互助精神」の崩壊と「バンド間交流」の欠無

を嘆くOBも多い。「十年を経ずしてクラブは消滅する。」と断ずるOBもいる。しかしこれらの懸念は我々OBにも少なからぬ責任があること、これからは現役との交流を密にしてバンド復活の手立てなども考えようではありませんか。

話を戻して、ただし当時は先のことを考えてクラブ形態を整えたのではなく苦しまぎれの方策であつただけのこと。

さて届出準備はほぼ整つたが、ほかに難題が一つあつた。クラブの部長は大学の教授又は助教授でなければならぬ、ということだ。音楽学校ならまだしも、どの教授が音楽好き、どちらの助教授がジャズ好きタンゴ好きなんて判るわけがない。私はかねてから知己を得ていた文学部英米文学の教授(故)橋 忠衛先生を訪ねた。先生は「私が部長になることはできないが誰かを紹介して上げることだけはできるが誰かを紹介して上げるから暫く待っていなさい。」とお言葉を頂き辞去したがあの時の嬉しきは今も忘れていない。橋先生は昭和五十年に亡くなられたが没後出版された「橋 忠衛エッセイ集」(火 崑岡に炎ゆれば)の中で学生の質の低下を嘆き書かれた一文に「チンハンジがカストリでも飲んだのかと思ふようなジャズなどを二十世紀の音楽だと思つたりすることが民主主義ではない。」とあり、この文が明治大学新聞に掲載されたものと知るに及んで、よくぞあの時私の願いを聞き入れて下さつたものだといふ感謝半分、不意にも幾度か伺つたが、酒になり議論となつてちよつとも反抗すると床の間に飾つてある、陸奥守吉行の脇差を腰に構え「叩き切つてやる、そこに直れ。」とぞぞ、御随意に。」

と、やりあったのも今は懐かしい。先生は居合道七段で逃げて無駄だと私も分かってたし、本当に切られるとも思わなかったが目の掘わり様が怖かった。

さて何日かを経て橋先生から電話を頂いた。「大学院の研究室×××号室へ、小川茂久先生を訪ねてお願いしなさい。小川先生はまだ講師だが助教になるまで私が後見役ということで学生課にも話してあるから」とのこと。天にでも昇つた気持ちで早速に島田先輩と共に小川先生を訪れた。以来三千数年、小川先生には公私共にお世話に相成ることになる。なにせ厚顔にも私の結婚の仲人までお願いしたのだから。小川先生から届出書類にサインと印鑑を頂き研連に提出。

学生課へはもう大きな顔をしてのりこんだ。それまで私は旧ジャズクラブの一員として顔を知られていたのでまずい、ということでも学生課との折衝は小島一統君に一切を頼んでいたが、もう遠慮は要らない。軽音の部長をどなたと心得る、この印籠が目にはいらぬか。と天下の將軍、副將軍の使者にでもなつたような気持ちだった(あの頃テレビの水戸黄門ははじまっていたかな?)。当時は未だ苦かった学生課職員西さん(後に就職課々長としてマスコミによく登場した)、伊藤さんは我々の良き理解者で至つて好意的に遇してくれていた事は小島君を通して分かったが、西さんには「お前、橋先生とどんな知り合いなんだ」と不思議そうに聞かれたときは得意の絶頂だった。のちに伊藤さんの結婚式披露宴に小島君がバンドを入れて謝意を表したが、大学当局の人も全部が頭の堅い人と云うわけではなかった。



研連からは一ヶ月くらいで仮公認も下り、部室とはいえぬが研連本部室の一隅を楽器置場として使うことも許して貰い、一応は順風満帆の船出ではあった。研連は二部の組織であり、役員も午後五時過ぎでない本部室へ顔を出さないで、昼間は格好のたまり場となった。島田先輩が応援団の吹奏楽部にも顔を出していたこともあって応援団の連中もよく遊びにきた。亡くなった俳優の郷 琢二さんもよくきていた。活動面では島田、安藤、稲垣先輩のメランコリー・ギャッツを中心に菅谷先輩のハワイアン、谷口先輩はジャズとウエスタンを手がけ、平田先輩、小島君らのスイング・コンボ、新入部員達のデキシーのグループ、島田先輩が目的のフルバンドの育成とそれこそ他日のごとき勢いでクラブは活性化した。

それにしながって増えるのが楽器の数。研連本部室の一隅の置場はやがて部屋数の四分の一、しばらくすると三分の一を占めるようになった。必然ながら研連役員からは文句が出るようになる。しかし研連会長殿が在学中は不満分子を抑えてくれたのでまだよかつた。が翌二十五年に卒業すると急に迫害が厳しいものとなった。好事、魔多しである。もつともこれを逆の立場で見れば当然といえげない。不合法占拠も是れはだし、となる。甘えていた我々も悪かつた。しかも島田安藤、稲垣、谷口、菅谷先輩達も卒業し頼れる人もいなくなつて一氣に二年生の我々に責任の全てがのしかかつてきた。それに加えて研連の内情もよく分かつてきた。研連は文連に比べ部室の数が五分の一ほどしか与えられていないので一部屋に三つ四つのクラブが同居しており、新参者の我々に到底満足なスペースが与えられない余裕も皆もない。比べて文連は部室は不足ながらも小さなクラブだと二つ同居している程度、軽音の将来を考えたも文連のほうが良い。よし、ここは一つ文連に鞍替えしようかと相談がまとまつた。ならば俺に任せよと、と藤井英一君がその役を引き受けてくれた。

幸い研連の仮公認はとれているので、移籍となれば多少の情状酌量の余地は有るだろうとは我々の勝手読み、後は藤井君の手腕に託すのみだった。一方研連からは研連本部室からの退去命令が出た。しかしこれには仮公認を受けていることを盾に頑強に抵抗した。ならば代わるべき部室を与えて欲しいと。そんなものがないことは白も承知だがそこを出ることは楽器置場を失うと同時に連絡場所も失つてしまう。今ここでそれらを失うことはクラブの壊滅につながるかわない。ここは一つ陰謀自重だ、いつになるかわからないが文連の認可が下りるまでは。少なくとも昼間だけは勝手に使うことも出来る。楽器は全部引き上げると退去したと思われからとドラムセットとペー一本を置いて場所を空け恭順の意を表した。そうこうしながら研連には公認願を出した。勿論不認可であった。さぞかし厚顔無比のやからと映つたであろうが。私は研連の役員になつていたのでから軽音楽クラブの公認願い審議会にも出たが評決の結果は公認賛成ゼロであった。その後何回かは役員会にも出たが針のむしろに座つてはいる感じ、感情の対立と云うよりは完全無視された状態であつた。

明けて昭和三十六年春、ついにフルバンドが結成された。ビックアップコンボはスイング、デキシーそれにメランコリー・ギャッツ、ハワイアンも男子と女子ウエスタンと完全にクラブ活動の基礎は固まつた。そして同年秋、ついに念願の文連の公認を得て我が「明治大学軽音楽クラブ」はその後の発展を目指して堂々の行進を始めたのである。部室も体育館の中二階にどこかのクラブと同居して与えられたが厚顔無比なる先輩を持つた超厚顔無比なる後輩達はその後いくばくもなく部室を独占してしまつたと聞いている。

部史の続きは文連加盟奮闘記を藤井英一君に依頼して私の筆を置く。